

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02807

研究課題名(和文) グローバル化時代のパブリックスピーキングにおける「説得」の諸相

研究課題名(英文) Aspects of "persuasion" in Public Speaking in the Age of Globalization

研究代表者

深澤 のぞみ (Fukasawa, Nozomi)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：60313590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、グローバル社会で必要な自分の考えを他人に伝える能力であるパブリックスピーキングにおいて、いかに他人を納得させるか、すなわち「説得」がどのようなプロセスで実現するのかについて明らかにしたものである。具体的には、説得に成功したスピーチは聴衆の予想を裏切るような展開をし、それを効果的に伝える戦略が多く取られていることが明らかになった。また、この結果から、外国人に対する日本語教育におけるパブリックスピーキングの指導では、学習者自らが聴衆に自分の話を効果的に伝えるための方法を考えさせることが重視されるべきであると指摘した。さらに、非言語行動を加えたマルチモーダル分析の方法も検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化が進み、公に向けて発信されたメッセージの重要性が言われるようになっている。しかし日本語でのパブリックスピーキングにおいて、聴衆への説得がどのように成功するかを検証した研究はそれほど多くない。本研究では、「ビブリオバトル」という競争的な仕掛けを持ったパブリックスピーキングをデータとして、説得につながる要素のうち言語面での分析を行い、説得が成功するモデルを抽出することができた。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies how to persuade others in public speaking which is an ability to transmit one's idea necessary in the globalized society, that is, what kind of process "persuasion" is realized. Concretely, it was clarified that the speech which succeeded in the persuasion made the development which was contrary to the expectation of the audience, and that the strategy which effectively conveyed it was often taken. And, from this result, it was indicated that in the guidance of the public speaking in the Japanese language education for the learner it should be emphasized that the learner himself considers the method for effectively transmitting his story to the audience. In addition, the method of the multimodal analysis which added the nonverbal behavior was also examined.

研究分野：日本語教育

キーワード：パブリックスピーキング 説得 言語行動 非言語行動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究では、グローバル社会で必要な、情報や考えを他人に伝える能力であるパブリックスピーキングにおいて、いかに他人を納得させるか、すなわち「説得」がどのようなプロセスで実現するのかについて検証を行うことを目的としている。

まず本研究を目指した社会背景として、グローバル化の進む世界で、公に向けて発信されたメッセージが人々に大きい影響を与えるようになってきていることが挙げられる。それは日本語でも例外ではなく、日本語学習者や日本語母語話者が、さまざまな場における自己表現法として重視されるようになってきている。本研究では、新しい情報や自分の考えなどを日本語で他人に伝えることを日本語パブリックスピーキングと定義した上で、いかに他人を納得させるか、すなわちいかに効果的に説得できるのかを検証することを目指す。なお、本研究ではメッセージを通して相手を納得させることを「説得」と呼ぶ。

そして「説得」の要因は、言語形式や内容だけでなく、非言語行動によるものも含まれると考える。具体例を挙げよう。2020年のオリンピックを東京に招致することに成功した一因として、滝川クリステル氏の行った、いわゆる「おもてなし」スピーチが大きい勝因になったと言われている。このスピーチはフランス語で行われ、わかりやすい印象的な内容であるという評価の一方、実際に日本人が行わない合掌の挨拶の手振りなどについては批判が起こった。聴衆である100委員のステレオタイプに訴えて、日本人の礼儀正しさを伝えるのに一定の効果があったことは事実であり、スピーチの説得力には、論理や言葉以外の要素もあることが想像できる。このことは、英語や中国語など、他の言語でのパブリックスピーキングとの共通項や差異を調べる事で、グローバル化時代の日本語でのパブリックスピーキングの位置付けや日本語教育での具体的な方法の提案を行うことの重要性を示しており、本研究の目的の一つとする。

なお申請者らは、本研究に先立ち、平成22年度科研(「日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した総合的研究」課題番号:22520525)(以下H22科研と略)に続き、H25科研(「グローバル化時代の自己表現のための日本語パブリックスピーキングに関する研究」課題番号:25370585)にて、いくつかのジャンルのパブリックスピーキングを対象に調査を行った。ここまでに明らかになったことをまとめて記す。

まず本研究の基礎部分を成すH22科研で、申請者らは「日本語パブリックスピーキング」を定義し、その上で、日本語教科書や日本語学習者への聞き取り調査などを行った。その結果、日本語教育でパブリックスピーキング自体は重視されているが、扱われるジャンルには偏りがあること、必要な指導項目などの整理はされていないことや文化差などを意識した教育がされていないことがわかった。そして高度人材の外国人日本語使用者に必須のパブリックスピーキングのジャンルの1つとして代表的な日本語の式辞スピーチとアカデミックプレゼンテーション(学術発表)を、ジャンル分析(Swales 1990^{注1})の手法で分析と考察を行い、典型的な展開パターンやジャンルを決定する定型表現の抽出を行った。また、日本語教育における効果についても検討し(業績5, 10など)、さらに文化差による検討も行った^{注2})。

これらの知見を踏まえて、以下の2.で述べることを目指して本研究を進めていくこととする。

注1) Swales (1990) *Genres Analysis: English in Academic Settings*. Cambridge Univ. Press

注2) 于霄(2015)『政治家演説の日中対照研究』(2015年金沢大学大学院修士論文)

2. 研究の目的

本研究の目的は、パブリックスピーキングの言語行動と非言語行動も含めた量的および質的な調査を行い、ジャンルや文化の差も分析したうえで、「説得」のプロセスを明らかにし、モデル構築を試みることである。

具体的には、人々が社会生活を行う中で行うパブリックスピーキングで、説得を聴衆に伝えたい内容を納得させるためのプロセスととらえ、説得がどのようなプロセスで行われ、どのように成功するのかということに焦点を当てて調査分析を行う。またその際、説得の成功の要素となるのは、前述したように言語的な要素だけではないとも考えられ、言語、非言語、環境などの要因を統合して現象を分析するアプローチであるマルチモーダルな検討を行うことを目指す。

3. 研究の方法

パブリックスピーキングにおける説得プロセスを、例として「ビブリオバトル」（複数の参加者が5分間で自分のおすすめの本を紹介するスピーチを聴衆の前で行い、聴衆が投票で一番読みたい本を選ぶという書評ゲーム）のデータを用いて、言語および非言語面の調査から抽出する。それにより説得プロセスのモデルを構築する。

言語差や文化差についての分析を行う。

非言語行動も含めたマルチモーダル分析の手法を検討する。

外国人日本語学習者や日本人母語話者に対する教授法や研修方法の提案を行う。

4. 研究成果

4.1 パブリックスピーキングにおける「説得」のモデル構築

まず説得がどのように達成されるのかについて、説得プロセス全体を分析することを目指した。その具体的な一例として「全国大学ビブリオバトル」（全国決勝戦）のデータ、および、留学生の日本語クラスでの「ビブリオバトル」の実践データを用いて、説得のプロセスやどのような条件で説得が成功するかの分析を行った。データの文字起こしデータを用いた分析の結果、聴衆に対して質問をしたり、聴衆への提案を繰り返したりをするなど、さまざまな形で聴衆への働きかけを行うことの重要性が浮かび上がった。また、「ビブリオバトル」では、スピーチの後で聴衆との質疑応答を行う時間が設けられていることが特徴であるが、ここで聴衆からの質問に効果的に答えられることも重要である可能性が明らかになった。必ずしも「正しい回答」をすることが重要なのではなく、聴衆の質問の意図を理解し、逆に聴衆へ質問するなど、積極的に聴衆とコミュニケーションを取るきっかけにする効果を持つことがわかった。つまり、一方的なスピーチでは、どんなに内容がよいものであっても効果的であるとは限らず、聴衆と何らかの形で直接コミュニケーションが実現でき、それが互いの理解の共有につながっていることが、説得に大きい影響を持つのではないかと考えられる。さらにこのことは、21世紀を生き抜くのに必要な学びとしても重要であることにも言及した（深澤（2019））。

そこでさらに、山路他（2014）における「コンテキスト共有」と、Hyland（2005など）の「メタディスコース」の理論を用いて、「全国大学ビブリオバトル」（全国決勝戦）のデータと準決勝データや初心者データを比較させ、説得のプロセスやどのような条件で説得が成功するかの分析を行った。その結果、説得が成功する際のパターンが明らかになった。すなわち話し手がスピーチの導入部で行った「コンテキスト共有」が起点となりスピーチが展開するが、この内容を保持しさらには途中でその内容を覆すなど、聴衆の印象に残りやすいスピーチの構造を持っていること、そのために効果的なメタディスコース表現が用いられていることなどを明らかにした。これが一つの説得のモデルであると言えよう（深澤・山路・須藤（2018））。

加えて、ピブリオバトルでチャンプ本に選ばれたスピーチの構造を、AI で用いられる手法（SVM や主成分分析）を用いた分析も行った（Shangfei・Yamaji・Suto(2019)）。また「説得」と関連して、ブレインストーミング（グループディスカッション）を活性化させるための手法についての研究を行い、議論で出されたアイディアに関連する語や、その語から検索された図を提示することで、アイディアの幅が広がることを実験を通して確認した（Suto(2018)）。グループの議論の中で、「合意に達する」ことによってアイディアがまとまるという考え方は、「説得」の構造の一つであるとも言える（Suto(2019)）。

4.2 パブリックスピーキングの言語差や文化差およびマルチモーダル分析

パブリックスピーキングの言語や文化による差異についての分析も行った。分析の観点や評価の視点などについて、イギリスの研究者らと講演を行った上でワークショップ形式で議論を行い（深澤（2017））、また国際共同研究者であるイギリスの研究者らとで検討を開始した。具体的には、世界で多く開催されているスピーチコンテストにおいて優勝したコンテストスピーチを対象とした分析である。スピーチコンテストは、多くの言語で、また世界各地で行われているが、コンテストに出場する以前に、原稿が作り込まれ練習がかなり重ねられていること、そしてコンテスト当日の評価の仕方も様々な基準で行われるという特徴がある。

この検討では、まず海外で行われている、あるいは外国人日本語学習者が行なっている日本語スピーチコンテストの映像を対象に、これらを整理し、どのように分析すべきかに焦点を当てた。これは複雑な過程のためまだ試行を重ねている段階である。そのためこの分析の成果はまだ限定的であるが、同じ日本語を用いたスピーチであっても、外国人日本語学習者によるスピーチの方がはるかに非言語行動が多く観察できることが明らかになった。言語や文化による異なりの分析の成果は、まだ部分的ではあるが論文にまとめた（深澤（2019））。

非言語行動の分析を「説得」の成功プロセスに含めて検討することも、本科研の目的の1つであった。これについて、パブリックスピーキングのデータで観察される非言語行動のうち、視線行動、手のジェスチャー、笑いやうなずきを抽出し、言語行動とあわせて検討を行うマルチモーダル分析を行った。この分析はまだごく初期のものではあるが、言語的な分析と非言語行動の分析をあわせて行うための方法論を検討した上で、実際に分析を行ったものであり、今後のマルチモーダル分析を進めていくための資料となりうるものである（深澤（2019））。この研究目的については、まだ継続し展開中であり、次の科研となった「パブリックスピーキングにおける「説得」のマルチモーダル分析」（19K00706）のテーマに引き継いで進めているところである。

4.3 パブリックスピーキングにおける「説得」と日本語教育

本研究の最終目的は、パブリックスピーキングにおける「説得」のモデル構築を行い、日本語教育や研修の方法を提案するということである。いくつかの講演会やワークショップで、パブリックスピーキングの教育の必要性や具体的な方法についての講演を行い、意見交換を行ってきた。

これらの内容を基に、具体的な日本語教育の方法について、パブリックスピーキング教育を留学生対象の日本語教育の場で数年にわたり行った結果を教科書にまとめ、実際の教育を行いながら検討をさらに続けた（深澤・濱田他（2018））。これらの実践から、パブリックスピーキングにおける聴衆重視の姿勢や伝わりやすい表現や話し方などについて日本語学習者自らが気づく過程などを、日本語学習者の授業アンケートにおけるコメントなどから具体的に示し

た。さらに海外の日本語教育における日本語学習者に対するパブリックスピーキングの指導法についての議論も行った。

パブリックスピーキングの指導では、学習者のスピーチ原稿を何度も推敲して仕上げさせ、何度も練習させて本番に臨むという方法では決して十分ではないこと、「説得」を成功させるためには、学習者自らが聴衆を重視することの重要性に気付き、聴衆を意識することから始めなければならないということを示すこととなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 深澤のぞみ・山路奈保子・須藤秀紹	4. 巻 47(1)
2. 論文標題 日本語パブリックスピーキングにおける説得の特徴 書評ゲーム「ビプリオバトル」の観察から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 25-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深澤のぞみ	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語パブリックスピーキングの マルチモーダル分析のための予備的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢大学国際機構紀要	6. 最初と最後の頁 99-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深澤のぞみ	4. 巻 20
2. 論文標題 日本語教育におけるパブリックスピーキング 21世紀に必要な学びの1つとして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 留学生センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 深澤のぞみ・深川美帆	4. 巻 2
2. 論文標題 学部留学生対象のパブリックスピーキング能力を育成するための実践活動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金沢大学国際機構紀要	6. 最初と最後の頁 61-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hidetsugu Suto	4. 巻 18
2. 論文標題 Can "Semi-relevant Images" Vitalize Brainstorming?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Transactions of Japan Society of Kansei Engineering	6. 最初と最後の頁 155-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5057	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 深澤のぞみ
2. 発表標題 アカデミック・ジャパニーズとは何か - 日本語授業への取り入れ方 -
3. 学会等名 信州大学グローバル教育推進センター日本語教育研修会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 深澤のぞみ
2. 発表標題 21世紀に必要な学びとしてのパブリックスピーキング
3. 学会等名 日本OPI研究会第99回定例研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深澤のぞみ・札幌寛子・濱田美和・深川美帆
2. 発表標題 大学初年次留学生のためのアカデミックジャパニーズ総合教材の開発
3. 学会等名 2017年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 深澤のぞみ
2. 発表標題 パブリックスピーキングと日本語教育
3. 学会等名 英国日本語教育学会研修会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山路奈保子
2. 発表標題 読書体験をシェアする活動の実際
3. 学会等名 令和元年度檜山管内読書活動活性化フォーラム兼渡島・檜山管内図書館（室）職員等研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hidetsugu SUTO
2. 発表標題 What type of hints can vitalize the brainstorming session?
3. 学会等名 SASE-MAICS2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yue Shangfei, Naoko Yamaji ,Hidetsugu Suto
2. 発表標題 Analyzing relationships between speech contents and audiences ' empathy
3. 学会等名 生命ソフトウェア・感性工房 合同シンポジウム2019
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 深澤のぞみ、濱田美和、深川美帆、札幌寛子、松田佳子、藤井晶子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 100
3. 書名 21世紀のカレッジ・ジャパニーズ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	山路 奈保子 (Yamaji Naoko) (40588703)	室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授 (10103)	
研究 分担者	須藤 秀紹 (Suto Hidetsugu) (90352525)	室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授 (10103)	